

# 陳 述 書

2018年 8月 7日

氏名 榊原洋子 印

住所

(榊原洋子) 金笑子, 後に金京玉と改名 (公民証発給の際に「子」は日本式の名前なので改名させられました)

はじめに

私は思いがけない幸運に恵まれて生き地獄の北朝鮮から脱出し, 奇跡的に故郷・日本に戻って来た脱北帰国者のひとりです。

厳しい統制が布かれた, 現代では想像もつかない社会で自由を奪われ, いつ餓死するかも知れない状況におびえながら生きてきました。日本からの仕送りがなかったら私たち一家もおそらく飢え死にしていたことでしょう。

差別のひどい日本を逃れて「祖国」の懷に抱かれたはずの「北送者」は資本主義に汚染された汚れ物あつかいされ精神的に苦しみ, どうてい適応できない生活を強いられてきました。

いまだに在日の北送を「帰国」あるいは「帰還」と称しています。朝総連と日本人まで動員してまことしやかに宣伝された「北朝鮮は地上の楽園」という真っ赤な嘘にだまされ故郷でもないところに送られたのを, どうして「帰国」と呼べるのでしょうか。

北送は拉致であり, 在日と日本人妻と夫, そしてその家族は拉致犠牲者です。この人たちは今も生き地獄であえいでいます。もうすでにたくさんの方が恨みを抱いてこの世を去りました。私たちは心を引き締めて彼らの救出に乗り出さなければなりません。一日でも早く, いや一刻でも早く……。

私はいま自由を取り戻し, その幸せをしみじみと味わっています。しかし北朝鮮で生きた42年半は死ぬまで, いや死んでもなお忘れることはないでしょう。

日本での出生と帰国までの経過

子どものない家に引き取られ, 養子として育った私は, 11歳のときに両親とともに北朝鮮に渡りました。

北朝鮮の地に着いた瞬間から、いや、日本を発つ前に真っ赤な嘘にだまされて海をわたった私たちは、それから40余年もの歳月を嘘偽りの泥沼の中をさまよいながら生きてきました。その間、片時も日本を忘れたことはありません。

でも日本に帰って来れるとは夢にも思いませんでした。通行証明書がなければ、隣村に住んでいる親のところにも行けない国です。

国外に出るといっては幻の話、想像すら出来ません。

「血で結ばれた兄弟」といわれ、小さな川を渡ればすぐその中国にも行けないのです。

日本に戻って来て、これが現実なのかと辺りを見回すことがあります。そしてたらきれいに立ち並んだ日本式家屋や日本語で書かれた看板、朝鮮では見られない自動販売機などが目に入り、あ、本当に私は日本に帰って来れたんだなど、改めて幸せを感じます。

私は誕生まもなく、在日朝鮮人である金相根（仮名、本名・容徳）、崔花子夫妻のもとに養子として入りましたが、1950年2月4日の旧暦に当たる日の日柄が良いという理由で同日を誕生日として届けられました。当時の養父母（以下父母）の居住地は広島市福島町でしたが、その後同市南観音町3丁目824番地に移り、朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮）に帰国するまでそこに住んでいました。日本の出生届けは2月12日でした。

私の父 金相根（仮名、本名・容徳）の本籍は現在の大韓民国慶尚南道陝川郡ヨンジュ面ウォルピョン里であり、日本には戦前徴兵を逃れるため密航してきました。仮名を使ったのはそのためであり、北朝鮮帰国後は本名の容徳を使用しました。

母 崔花子の本籍は大韓民国（以下韓国）忠清南道です。父母は結婚したものの、子供が生まれず、相談の上、養子をもらうことにし、養子として入ったのが私でした。その間の事情を後に父に質したところ、養子であることは認めたものの、母が全てを取りまとめたので、母亡き後、詳しいことはわからないとのことでした。

父母は、朝鮮人差別の厳しい現実の中でも土木作業員と雑用の共働きで熱心に働き、私が物心ついた頃は豊かとは言えないものの、不自由のない生活をしていました。住居が朝鮮人部落の中にあっただので、両親はそれなりに朝鮮風の生活を楽しんでいたようでした。当時韓国は極度に貧しく、父は定期的に物資を韓国の実家に送っていました。私が父の本籍地を記憶しているのはそのためです。また、朝鮮人部落の他の朝鮮人が長屋に住んでいたのに、私の家は一戸建てでした。他に一戸建てはそう多くはなく近所では君子（友人の朝鮮人）の家だけでした。

ところが、1959（昭和34）年母が脳出血で倒れ、自宅で寝たきりの状態となり、当時小学校4年生で9歳の私では世話ができず、父が1年間近く看病に専念し、その後は仕事から帰った後に看病するようになり、私たち一家は次第に経済的余裕を失っていきました。

同年12月から北朝鮮への帰還事業が始まり、家に在日本朝鮮人総連合会（以下朝鮮総連）の人々がやってくるようになり、熱心に北朝鮮帰国を両親に説得しました。その朝鮮部落は大韓民国居留民団（以下民団）系の人々が多く、両親も最初は拒絶していました。当時私は小学校高学年だったので全ての話を聞いたわけではありませんが、北朝鮮に帰国すれば、職業、住居は斡旋してもらえ、学費、医療費は無料ということでした。北朝鮮・総連側の言葉で言えば、「教育も医療も無料、祖国はすべてを保障する」ということになります。さらに、当時まだ高価だったグラビア雑誌（朝鮮画報はまだありませんでした）も見せられたのですが、そこには立派なアパートや瀟洒な住宅が写っていました。私の家は豊かとは言えないまでも、不自由はしませんでした。母が倒れてからは、次第に余裕がなくなり、学校へ支払う給食費その他が遅れるようになり、恥ずかしい思いをしたので、医療費、学費が無料、さらに立派なアパートや瀟洒な住宅に住めるなら北朝鮮に行ってもいいかなと思った記憶があります。

朝鮮総連の人たちは、毎日のように家にきて、お金がなくても生きていける国、地上の楽園—祖国の話をしていました。

母の病気もただで治せるし、学費という言葉自体が祖国にはないということです。

家計が苦しかったため、毎月の給食費が滞納していました。

期日がすぎたら経理の先生がみんなの前で誰々さんまだ払ってませんよね、明日までには必ず持ってくるように、と催促されます。

学校からの帰り道、四葉のクローバをさがしながら（幸せをよぶといわれていた）とめどなく流れる涙に頬を濡らしました。でも父さん、母さんには言えません。

私は実の子ではないし、学校での恥ずかしい思いに打ちのめされていて、甘えたり駄々をこねる普通の娘ではなく、内気で可愛げのない子どもに育てていたのです。

小さな心が傷つき、いつそ学校を辞めてしまおうかと本気で考えたりしていた私には、砂漠にオアシスのように思えました。

行きたい！地上の楽園に行きたい！その思いは日に日に募るばかりでした。

最初は、この世の中にそんな楽園などあるものかと、半信半疑で聞き流していた父も、もともらしい総連の人たちの熱弁に心が揺れていくようすでした。

そしてその動揺は、祖国に行こうという決断の方向にだんだん傾いていき、寝たきりだった母の考えなどは無視されたまま、帰国の申請は行われたのです。

申請したことが知られると、あちこちからいろんなうわさが耳に入ってきました。

帰国事業がはじまってすでに1年半が経っていたので、地上の楽園という宣伝とは程遠いとか、電灯がないところもあるとかいう噂でした。

それを聞いた父は動揺しました。自分の誤った判断で家族が不幸になるかもしれないと考えたのでしょう。帰国申請を取り下げようとする、総連の説得がまた始まりました。

さんざん迷い悩んだあげく、父は北朝鮮へ行くことを決めました。民族的蔑視と貧困に幻

滅を覚え、たとえ貧しくても万人平等の社会主義祖国には未来があると思ったのです。

そうして私たちは希望をいだいて帰国船に乗りました。1961年の5月でした。

私たち一家が住んでいた朝鮮人部落は50世帯以上あったと思いますが、民団系が主流で、1961年5月に私たち一家が帰国する以前には、同級生の君子一家が北朝鮮に帰国しているだけでした。父も何度も迷ったようで、北朝鮮帰国のための荷物を新潟へ送った後も行かないと決心を翻したくらいでしたが、結局朝鮮総連の人々の説得に負けてしまいました。母は当時の朝鮮女性らしく夫の決定に従うという態度でした。

父が北朝鮮帰国を決心するに従い、私は1961年4月広島市立南観音小学校6年に上がる代わりに、朝鮮学校に転校して1ヶ月間朝鮮語を習ったのですが、そのときは近所の朴順子という子について一緒に通学しました。5月は恐らく準備に追われていたと思います。しかし帰国する際持って行く荷物を新潟に送った後もそのまま生活できたくらいなので、置いていった物品が少しありました。当時まだ一般的とは言い難かった冷蔵庫も置いて行きました。置いて行った家財道具は恐らく朝鮮総連の人々か近所のひとが処分し、いくらにもならなかったと思います。ですが、物資不足の北朝鮮に行った私たち一家は、残してきた家財を思い、悔やむことになりました。

父にとって北朝鮮は未知の国でした。その未知の国へ行く選択しかできなかった父は、不安でたまらなかつたらしく、ずっと暗い表情でぼんやりと座っていました。しかし私は、給食費の心配をしなくてもいい安堵感から、どきどきわくわく、小さな胸を幸せでいっぱいしていました。

1961年5月21か22日頃、自宅を出て広島駅から帰国列車に乗り、23日頃に新潟に着き、日赤赤十字センターに入り、そこで3泊し、5月26日夕方頃に新潟港で第60次帰国船に乗り、28日（日曜日）朝頃、清津港に到着しました。船中では船酔いがひどく記憶していることはほとんどありませんが、食事の後に小さく、赤くなく、虫が食っているりんごが出てきて、「あれ？」と思った記憶があります。朝鮮学校では祖国のりんごは大きく、赤く、美味しいと聞かされていたからでした。

写真に写っていた朝鮮のりんごはこんなのじゃなかったはずですが、見ただけでも美味しそうな、真っ赤で大きなものでしたが、掌におかれたりんごは、小さく、ところどころに虫がついたみずぼらしいものだったのです。

新しい暮らしへの好奇心と、これからもっと良くなるはずの未来を描いていたわたしにとって、それは忌まわしい出来事でした。歓送でにぎわっていたはずの広島駅や新潟港の面影は全然あたまたに浮かんでこないのに、このりんごの一場面だけは、今でも鮮明に覚えています。

裏切られたようで、なんだか淋しい気がしました。それに船酔いが重なって気分が悪くなったわたしは、そのまま船室に引きこもってしまいました。

## 清津

そして「祖国だ！」という叫び声を聞いて甲板に上がったわたしは、あまりにもおどろいて言葉を失いました。それはわたしの目に焼き付いている、雄壮で華麗な写真の面影ではなく、おせじにも美しいとは言えない薄汚い建物が単調に並んでいる灰色の都市でした。

船を下りると大勢の人の出迎えがありましたが、人々の顔には脂気がなく、その姿はみずぼらしいものでした。歓迎式典では学生たちの演舞がありましたが、華麗とか楽しいという雰囲気はまったく感じませんでした。学生たちも疲れたような表情をしていました。埠頭に広島南観音町の私の家の近所に住み、先に帰国していた友人の君子の母親が来ていました。連絡があったのか、あるいは頼んでおいた荷物を取りに来たのかもしれませんが。私たち一家のほうに寄ってきましたが、声を掛けられるまで誰だかわかりませんでした。頬がげっすりこけ、体全体がやせ細り、色白だった顔は日焼けで真っ黒でした。母が「どうしたの。苦労したんだねえ」というと、「そんなことはない、そんなことはない」と君子の母親は強く否定しました。この母親は1年後、私が君子の家を訪ねたときには既に死亡していました。

清津の招待所、要するに帰国船から降りて帰国者たちが各地に散らばって行くまで過ごす宿舎のことで、そこで1週間ほど過ごして父親の仕事と住むところの配置を受けました。

招待所の窓から見える大通りを走る車は数える程度で、目を背けたくなるほどよれよれの衣装をまとった女たちが頭の上に荷物を載せてせかせかと歩いて行く姿や、裸も同然の子どもたちの生気のない顔を見ていると、不安でいたたまれなくなりました。後になって思い知らされたのですが、これはまだ地獄の入口に過ぎませんでした。

私たち家族が配置されたのは、咸鏡北道でも最も北に位置した鐘城というところで、父はここで農業に従事することになりました。

総連が宣伝していた、住みたいところで、やりたい仕事や勉強が出来るというのは真っ赤な嘘だったのです。

身を切るような寒さにしんどい野良仕事、一向に治らない母の病気が心に重くのしかかり、一年足らずで精神病に罹ってしまった父は、20余年ものながい歳月を49号(精神)病院に閉じ込められていました。

北朝鮮では精神病と診断されたが最後、本人や家族の意思に関係なく49号病院に連れて行かれます。そして84年の夏、傍に誰ひとりいない、監獄のような病室でそのまま息を引き取りました。

母もまた寝たきりのまま、北に渡って6年目の春、苦難に満ちた48歳の生涯を終えました。

父や母のことを思うと今でも涙が止まりません。かわいそうなお父さん！お母さん！祖

国を信じ人を信じ、幸せになれると信じてやまなかったわたしの両親は、このすべてに裏切られ、ふたたび戻ることの出来ない遠いところへ逝ってしまいました。

父は農業の経験が全くありませんでしたし、鐘城というところも地図で見ると中国国境に近い穩城の南隣で、清津のほぼ真北にありました。「それぞれの希望と能力に応じて」職業や住宅の配置を受けるはずでしたが、そんなことは全くなく一方的に指定されました。後に知ったところでは、このとき面談担当の指導員に賄賂を渡せば、ある程度は希望が入れられたようですが、もしそのことを知っていたとしても父の実直な性格では賄賂を渡すなどとてもできなかったろうから、同じことでした。

清津の招待所にいたとき私は鉄柵の外から地元の子供たちに石を投げられて額に傷を負いました。もちろん子供のことでですから、ただのいたずらかもしれませんが。しかし帰国船上から清津港を見たときから招待所を離れるまで、私は楽しいとか、暖かさのようなものは全く感じられませんでした。祖国に帰ったというのに。

#### 下三峰里

物心ついてから青春の時をへて、42年半を北朝鮮で過ごしました。

北朝鮮は悪い国、人間が暮らせるところではないと一言で片付けることは出来ません。

澄み切った青空の下、どこまでも続く緑の並木と、朝日が水平線を真っ赤に彩りながらぼっかりと浮かぶ状況はまさに一幅の美しい絵です。

苦しい生活に喘ぎながらも機会があるごとに、また機会をつくっては歌って踊る楽天的な人たち、貧しい暮らしの中でも、たまにこしらえた美味しいものを器に入れてお互い行き来する人情があります。

でも、世の中、景色だけをみつめて生きていけるものではないし、人情にも限りがあります。お腹が減っては美しい景色も目に入りません。自分が、自分の家族が飢えているのに、他人に、よかったら食べてみてと言えるものではないのです。

60年代も北朝鮮は貧しい国で、いつもひもじい思いをしなければなりません。それでもその時は今日より明日は、今年より来年はよくなるだろうという希望を持って頑張ってきました。今はしんどいけど良い日は必ずくると信じて一生懸命生きて来ました。半世紀近い歳月を・・・。

帰国して最初に入れられた清津招待所で何日か過ごした後、配置地へ向かいしました。配置とは住む場所や仕事を向こうのいうとおりに決められることです。この配置をめぐって何かといざこざがあったようですが、父は何の不平も言わず服従しました。こうして私たちは、現代文明とは程遠い北方の田舎へ行って農業に従事することになったのです。

農業管理委員会の建物の前で車から降りたわたしたちは、地元の人に案内されてこれか

ら住むお家へと向かいました。見渡す限り山，四方が山に塞がれた谷間に田畑があって，その間にぽつんぽつんとお家が建っていました。

先頭で静かに歩いていた案内人の足が止まり，閉ざされた大門の向こうに瓦屋根の大きなお家が私たちを見下ろしていました。古いながらもなかなか堂々とした構えの純朝鮮式の家屋です。こうした家屋を朝鮮では大空を飛ぶようなといいます，その表現にふさわしく，みつめているうちに気持ちが落ち着いてきました。

「わたしのお家だ」

胸のなかに居座ろうとした不安感がすうっと溶けて，心も体も軽くなったような気がしました。心なしか父と母も顔をほころばしているように見えました。・・・・・・・・

その瓦屋根の家がわたしの住むお家ではないと知ったとき，胸に穴がぼかんと空いたような虚脱感に襲われました。いや，そこは明白にわたしたちのお家でした。片隅の，6畳弱の部屋を改装して，身動きもままならない，ままごとのような台所をこしらえたウッパンサリ（居候）だったのです。

明け方になってうとうとまどろんでいた私は，かきこそと夢の中のように聞こえてくる音に目が醒めました。真っ先に白い天井が目に映り，次は黄色がかった紙を貼った格子戸に明るい光が射しているのが見えました。

ここはどこ？私はなぜこんなところで寝ているの？がぱっと跳ね起きて，まわりを見回すと，背を向けていた父が気配を感じたのか，私の方を振り返りました。

「お父さん，何してるの？」

「うん，ちょっと・・・・・・・・」

父の前に小さな壺がひとつ置かれています。中を覗いてみると白いお米でした。

「お米だね」

「うん」

改めて部屋の中を見回して，思わず溜息をつきました。家具ひとつないがらんとした部屋のすみに黒い鉄の釜がすえつけられたかまどがあって，その横にどんぶりやお皿が何個か入った食器棚が置かれています。

それから父も娘も，何を言ったら良いか分からなくなって，口をつぐんでしまいました。

部屋の中に小さな台所が作ってあり，かまどが二つあってそれで煮炊きをするようになっていました。便所は共同でした。ただ，水道はありました。私たち一家には思いもよらないことでした。民団側で言っていた「戦争（朝鮮戦争）のときに破壊されて住む家もない」という言葉が，父の脳裏をよぎったに違いありませんでした。日本では良い家とは言い難いものの，一戸建てで部屋は二つに広い台所があり，そこには冷蔵庫もあり，ご飯は電気炊飯器で炊いていましたし，プロパンガスを煮炊きに使っていました。テレビはありませんでしたが，毎日通う銭湯でみていましたし，当時一般の日本の家庭にある電化製品はほとんどあ

りました。そういう生活をしていたのです。もちろん、日本人よりは貧しかったのですが。

住居の部分はとんでもない出鱈目で、特に困ったのは風呂でした。日本にいたので毎日入浴する習慣がありましたが、行水するほかありませんでした。郡（里ではない）に一つ公衆浴場があるということでしたが、遠すぎて、とても利用できませんでした。肉はありませんでした。鮮魚は明太（助惣鱈）の干したものでした。

ですが、干した明太はすぐになくなり、米は1月足らずでなくなってしまい、その後は小麦粉にジャガイモを加えて粥にしたものを朝昼晩食べなければならなりません。小麦粉は殻ごと製粉したのか、黒っぽいものでした。両親はそうでもなかったと思いますが、私は麦飯さえ食べたことがありませんでした。生まれて此の方、主食とは米と信じきっていた私には、小麦粉にジャガイモを加えて作った粥など食べられるわけでもありませんでした。下痢が続く急激にやせて、体力はなくなり、寝込むまでになりましたが、食べるものが他にないので、そのうちに少しずつ食べられるようになりました。粥はその年12月の農場の決算分配があるまで続けました。

病気そのものはたいしたことはなくても、体力が弱っているので抵抗力がないのです。その後、たまにはありますが、塩漬けしたサンマが帰国者に対する「愛の配慮」という名目で配られたことがあります。

食料の配給は主食の米が、働いている大人1人1日700グラム配給されることになっていましたが、何やかやと引かれて全量支給されることは一度もなく、大体500グラム位でした。しかも白米100%ということではなく、半分以上がトウモロコシその他でした。

この当時味噌、醤油、塩は一定限度買うことが出来、1、2年後には無制限に買えるようになりました。その後70年代に入って制限が出来、80年代後半からは自家製となります。

副食の肉、魚、野菜などは洞に一つずつある副食配給の店にいけば買えることになっていましたが、実際は供給量が少なく、ほとんど買えるというわけではありませんでした。農村の場合は個人で飼育している豚を農場が買い上げ、それを屠殺して肉を農場員に分配するのですが、年に何回もあるわけではありませんでした。

衣食住のうち食、住について述べたので、残るは衣ですが、入手困難でした。ですが、当初は比較的困りませんでした。それは両親が北は寒いところだという意識があったらしく、日本で予想した必要量より多めに持っていったからです。しかし、靴には往生しました。入手できず、ガバガバの父親の靴を履いていた時さえあるほどでした。

日本から持っていった愛読書なども子供同士のやり取りからこんなものを持っていると危険だと感じて捨ててしまいました。ラジオは生活苦のためすぐに売ることになりました。

私たちがもう一世帯の家族が同じところに配置されたのですが、目的地に行く前に郡党



(郡の労働党組織)の幹部がちょっとした歓迎会を催してくれました。聞き取れない演説の後、その幹部がやさしい微笑を浮かべながら上手な日本語で誰へともなく訊きました。

「それで、祖国の温かいふところに抱かれた感想はどうですか？」

お互いちらちらと顔色をうかがいながら誰も答えないので、気まずい空気が漂うなか、沈黙を破ってはっきりとした声が響きました。

「おせじにも良いとは言えません」

日本で総連の高校に通っていた、私よりわずか4、5歳年上の女学生でした。瞬間、みんなが息を呑み、次は約束でもしたかのように幹部の方に視線を移しました。

その幹部は咎めるでもなく、気分悪そうでもなく、だからといって面食らった様子でもなし、冷たい表情で女性をじっとみつめていました。薄ら笑いすら浮かべて……。

なんてことをぬかすんだと大声で叱咤でもしていたらそんなにぞっとしなかったでしょう。でもそのときはただ、薄ら笑いを浮かべた冷たい目が恐ろしいと感じただけで、全部を汲み取ることは出来ませんでした。その幹部の薄ら笑いのかげに宿った真意を悟ったのは、それからずっと後のことでした。

—このパンチョッパリ（日本人の蔑称。パンは半分。半分日本人のやつ）ども、いまに思い知らせてやるぞ—

目的地へ向かうおんぼろ車の中で私は、彼女の手をそっと握りました。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うん。思ったとおりを言っただけだよ」

何カ月かすぎてその家族は村からいなくなりました。他のところへ引っ越したのかも知りません。ともかく彼女は会話が出来るただ一人の友達だった私に何も告げないまま、何処かへ去ってしまいました。

下三峰里に到着後数日して、父親は農場で働きはじめました。そんな必要はなかったのですが、仕事に早く慣れたいという父の希望からでした。熱心に働き仕事がよく出来るという評判をすぐに得て、秋には模範農民として表彰されて食べ物をもらった記憶があります。母はほとんど寝たきりで家にいましたが、休み休み便所に行くことはできました。日本にいるときから母は朝晩経を唱えていました。仏教の深い知識があったとは思えませんが、それゆえに素朴で篤信の人でした。北朝鮮でも、与えられた住居が狭い一室だったので、壁の高いところに棚のようなものを作り、それを仏壇代わりにし、壁にもたれた姿勢で朝晩経を唱えていました。普段寝たきりの母には経を上げることが楽しみでもあったようで、朝晩以外にも気が向くと経を上げていました。ところが、帰国後2、3ヶ月経ったある日、外出先から急ぎ帰った父が母のところに行き、「こんなことをしていると危ない」と仏壇代わりの棚を取り外し、母に経を上げることが止めると約束させました。私たち一家は帰国後2、3ヶ月経つまで北朝鮮では宗教が禁じられているのを知らなかったのです。

父は引越しの荷物が着く前に仕事を始めました。祖国の建設に少しでも役立ちたいと思ったようです。毎日朝早く起きて自分の手でご飯を炊き、一口食べては田畑に向かいます。

すべてがはじめての仕事なので、他の人より何倍頑張っても仕事ははかどらない。だからもどかしくいらいらして寸時も心休まる日がなかったのでしょう。結局10ヶ月後に父は精神がおかしくなっていました。

私は自分のことで頭がいっぱいだったので、父の苦しい胸中を、あたたかい一言さえかけてあげられませんでした。母は母で、朝早くから夜遅くまで外でうろつきながら、自分を構ってくれない父に対して不満をこぼすようになりました。

10日ぐらいは白いご飯を食べられましたが、壺のお米がなくなってからは、じゃがいもと小麦粉のお粥で食べつなぎながら仕事に出ていかなければならなくなりました。塩水にちっちゃなじゃがいも数個と、殻がついたままひいた黒くて粘り気のない小麦粉を少しこねて入れただけの、お米一粒もない水っぽいお粥です。

肉は1年に2、3回拝めたら幸運で、魚もめったに口に入りません。稀に塩漬けたさんまを店で売ってくれましたが、後で聞くとこれは「帰国者家族」だけに与えられた「党の配慮」でした。

隣近所の人たちがたまに、自宅の庭で採れた野菜を分けてくれましたが、3日に1、2食食べられる程度にもなりません。

母は鐘城（咸鏡北道穩城郡）に着いてすぐに郡病院に15日くらい入院しましたが、脳出血による下半身付随は治る見込みがないと見なされ、家にもどって過ごしていました。

その母にも水っぽいお粥だけの3食です。何を食べてもおいしい、育ちざかりの私のものどすら通らない粗い小麦粉粥を、患者の母も食べなくてはならなかったのです。

それさえもお腹いっぱい食べることは出来ませんでした。配給日が定められていて、生まじめな父は絶対にその日を破ろうとしなかったのです。私たちはいつもいつもひもじい思いをしました。

1962年2月頃、日本から帰国者が到着しました。この家族には人民班（小学生）1年生くらいの子供がいたのですが、到着後いくらか経たないうちに風邪にかかったという話を聞きました。そしてあっけなく死んでしまいました。するとその母親が発狂してしまい、国（北朝鮮）の悪口を言いふらして歩きました。冬なのに足は素足でした。この家族もすぐにいなくなりました。

12月になって農場の収穫の分配が行われると、食糧事情は良くなりました。61年は豊作でした。さらに62年度年は農民に優先的に米を支給するようにとの金日成の指示（教示）が出たとかで、主食の米は100%白米でした。

帰国した翌年1961年の2月か3月のことで、まだ寒い日でした。咸鏡北道鐘城という

ところは冬場、とても寒く、零下20度はざらです。父が突然いなくなりました。父の職場である農協に知らせると大騒ぎになり、部落総出で捜索したところ、3日目に山中で見つかりましたが、精神に異常を来していました。私の父が精神に異常を来したのは慣れない重労働の農作業、幹部からの圧力、現実への幻滅、自責の念などが理由だっただろうと思います。

幹部の圧力というのは、後になって知ったことですが、いろいろ物品を要求されていたそうです。最初は応じていたようですが、持っているものには限りがあるし、極端に物資不足の国であることを知った後では、簡単に応じることができなくなっていました。しかし幹部の要求は執拗だったようです。働いていなければ配給は受けられないし、刑務所行きなので、絶対に職についていなければなりません。

自責の念は妻子を連れてきてしまったことでした。加えて、「こんな国に連れてきて！」と母から責められることもあったようでした。母は私には何も言いませんでしたが、父とはしばしば諍いをしているようでした。日本にいたときにはなかったことでした。

日本にいたとき苦しめられた差別の問題からだけは解放されたような気がしていましたが、そうではありませんでした。

帰国者は帰胞(キーポ・帰国同胞の略)、在胞(ジェポ・在日同胞の略)と呼ばれ、バン・チョッパリと侮蔑して呼ばれることもあります。バン・チョパリとは「バン」は半分、「チョッパリ」とは獣の割れたひずめを指します。チョッパリは植民地時代に朝鮮人が下駄をはく日本人を獣の足にたとえた蔑称であり、帰国者は半日本人だということです。猛烈な反米・反日教育の北朝鮮で半日本人だといわれることがどれほど酷い侮蔑か想像に余りあるでしょう。さらに帰国者は軍隊にいけません。軍隊に行きたい人はあまりいないと思いますが、軍隊帰りでなければ一人前扱いされない北朝鮮社会では、いつまで経っても帰国者は半人前なのです。船乗りにもパイロットにもなれません。逃亡するかもしれないからだそうです。後になって、帰国者の子女も賄賂さえ渡せば入隊できるようになりました(90年代後半だったと記憶しています)

#### 朝鮮語について

当時、数え年で12歳だった私は人民学校(今は小学校)4年生に編入されました。しかし言葉が全然できないので、授業はおろか、まわりと意思の疎通もままなりません。机の前に間抜け顔でぼうっと座っていては家に帰る日々が続きました。

いま日本にもどってきた脱北帰国者の子ども達が皆さんの援助で日本語の勉強をしているのを見て、はるか昔のその当時が思いだされます。その時はただそんなものだと思っていましたが、「帰国事業」の虚偽性にあらためて憤りを感じます。

総連の連中はあらゆる美辞麗句をならべながら祖国を賞賛し、必死になって「帰国」を促しました。すべてを備えて待っているから何もいらぬし、なんの心配もないとそそのかし

たのです。

だったらなぜ何よりも先行しなければならない朝鮮語の習得に関心を向けなかったのでしょうか。なんの国家的措置も取りませんでした。彼らは在日同胞を自分たちの私腹をこやす踏み台としか思わなかったのです。

食べ物がない、生活必需品がない、それに加えて言葉ができない、聞き取れないという現状は、その苦痛を何倍も増加させました。ああ、もういやだ、日本に帰りたい……………。

日本をなつかしむ思いは日に日に募るばかりでした。日本にいたとき、学校の図書館で日が暮れるのも知らないでページをめくっていたことや、自転車に乗ってしょっちゅう通っていた市内の本屋さんの棚に並んでいた小説、独りでくすくす笑ってしまいあわてて辺りを見回させた面白いマンガの場面が頭のなかに浮かんで、私の心をあたたくもし、悲しませもしました。

#### 父のこと

私は小学校の2、3年生頃から自分が両親の本当の子ではないことを知っていましたが、両親が心配すると思い、私自身も真実を知るのが怖かったです。知らないふりをしていました。しかし両親の、特に父の愛情を疑ったことなど一度もありませんでした。

帰国後父が苦しんでいたとき、自分が相手になってあげるには幼すぎましたし、そのときは朝鮮語を覚えるのに必死でした。母も寝たきりでしたが、それでも日本にいるときは近所の人に来て話し込み、近所の噂には通じていました。しかし帰国後はそんなこともなくなり、話題も全くなり、父の相手をする人間はだれもいませんでした。帰国時父は42歳で家族を持ち、人生経験もある程度積んでいたのに「地上の楽園」といわれても信じなかつたろうと思います。しかし帰国を決断した背景には、苦勞するなら祖国のほうがし甲斐があると考えたことがあったに違いありません。亡国の民として生を享けた父の世代にとって、祖国という言葉の持つ響きは解放（日本の敗戦）後に生まれたものには理解できない甘く切ないものだったのかもしれない。その祖国に裏切られたという思いを抱いたときには、死にたいと思ったことでしょう。しかし死ぬのも簡単なことではありません。北朝鮮では家族の一人が自殺すると、家族全員に反逆者の家族というレッテルが張られます。北朝鮮の体制に反対する考えを持っていたために自殺したはずであるし、これは彼らの目から見ると反逆罪に当たるのです。逃げ場を完全に失ったと気づいたとき、精神に異常をきたしたのかもしれない。

#### 君子の一家

1962年4月に下三峰中学に入学した私は、7月頃咸鏡北道の学力競演大会に鐘城郡代表として出場することになりました。数学が主な問題でした。大会は金策であり、郡代表として帰国者も何人かいました。帰路、日本で近所に住み、同級生だった君子の家に立ち寄ることにしました。君子の家は古茂山にありました。住所は知らず、ただ古茂山に住むとだ

け知っていたので、帰国者の一家だと方々訪ね歩いてようやくたどり着きました。当時は身なりや雰囲気ですべて原住民と帰国者ははっきりと区分できましたので、帰国者と思われる人に道を聞いたのです。古茂山は大きなセメント工場のある町で、町全体が粉塵にまみれているようなほこりっぽいところでした。君子の家族は、当時文化住宅といわれた、一戸建ての住宅を2軒くっつけた形の家に住んでいました。いわゆる二世帯住宅です。部屋数は2つで、他に広めの台所が付いていました。住居に関しては私たち一家のものより良いものでしたが、君子の家族は六人で、日本では部屋数5、6に台所のある大きな一軒家に住んでいました。私たち一家が帰国したとき清津港に来ていた母親と末っ子は既に死亡していました。夕飯を食べさせてもらったのですが、食べ物に関しては私の家よりもっと不足しているようでした。このとき私は食べ物に関しては、農村に住んでいるので比較的恵まれているということを知りました。翌日、君子の父親が気を使ったのでしょうか、食堂に連れて行ってくれました。ひどくまずい料理でした。君子の父親が、遠くを見つめるような目付きで、ぼそぼそと「どうしてこんな人の住めないようなところに来てしまったのだろう」と言いました。別れ際、君子に休みに下三峰里に来よう誘いました。田舎だけど、空気はいいし、きれいなところで、それに白米を食べさせてあげると伝えました。夏休みに君子は父親を連れてやってきました。君子の父は私の父と年齢の差はあるものの、友人関係にありました。その後しばらくして再び君子の家に訪ねて行くと君子の父は変わり果てており、ぼそぼそ独り言ばかりで、気味が悪く近寄れませんでした。君子と会ったのはこれが最後で、以後私が漁郎（オラン）郡へ移り、さらに清津市と移住したので連絡がつかなくなってしまいました。

#### 中学校、高等学校と教員生活

1963年9月漁郎郡會文里へ移り、十月中学校（十月はロシア十月革命にちなんだ学校の名前）へ転校しました。1年ほど経ったころ、偶然広島の朝鮮学校のクラスメートの朴玉英に出会いました。仕事を手伝って會文里まで来たようでした。「今どこに住んでいるの？」と尋ねると「鏡城」という答えが返ってきました。それだけでした。帰国者の友達に会ったというのに余裕がないので、行ったり、来たりできないのでした。

1965年3月同中学校を卒業し、漁郎農機械技術学校に入学しました。農機械技術学校というと、日本でいう各種学校のようなのですが、実際は高等学校のことです。北朝鮮では学校制度がしばしば変わり、この当時人文系（日本で言う普通科）の高校は少なくとも地方にはありませんでした。漁郎郡には農業技術学校と農機械技術学校があり、4年制でした。中学のときは家から学校まで近かったのですが、技術学校は徒歩で40分かかる距離にありました。日本から自転車を持ち帰ったのですが、生活苦のため既に売り払っていました。朝、母の世話をしてから学校へ出かけるので、どうしても14、15分遅刻することが多かったです。遅刻して教室に入るのが恥ずかしくてそのまま家に戻ったり、家から出ることも少ない日もありました。時には、ひと月も行かないときもありました。当然学校からは先生が家にやってきて、いろいろ家庭の事情を聞かれました。しかし勉強のほうは別に支障はなかつ

たです。會文里の人民委員会の書記の仕事を手伝うことがたびたびありました。北朝鮮は閉ざされた統制社会であり、その社会を維持するために膨大な報告書が必要で、作成のための人手が足りないのです。67年3月寝たきりだった母の容態が悪化して学校どころではなくなり、結局学校をやめて働くことにしました。学校や周囲からはもう少し頑張り、惜しいといわれましたが、どうしようもありませんでした。里の人民委員会に名前を知られていたお蔭か、すんなりと里にある幼稚園に教養員(保母)として就職することが出来ました。幼稚園に就職して何日も経たない4月6日、とうとう母は死んでしまいました。まだ48才にもなっていませんでした。寝たきりになって8年、うち6年は北朝鮮で暮らし、食べるものもろくに食べられず、唯一の楽しみだった念仏も禁じられて寝ながら一体何を思ったでしょう。人生の前半26年を植民地下の朝鮮人として過ごし、日本の敗戦後は広島で16年暮らしました。恐らく、父と健康で暮らした広島の十数年だけが、生涯で唯一平穏で幸せな日々だったろうと思います。

會文里幼稚園に1年勤めた後、1968年4月漁郎人民学校(小学校)の教員になりました。といっても教員免許があるわけではないので、代用教員です。その後、試験で教員免許を取得し、正規の教員になりました。教師という職業はそう悪い職業ではありません。職業が自由に選べるわけではない北朝鮮においては特にそうです。朝鮮では先生のことをソンセン・ニムと言いますが、ソンセンは漢字で先生、ニムは漢字はありませんが、様にあたります。だから先生様というわけです。自分の一生はこれで決まったと思い、教師生活に集中しようと決心して励みました。働くようになって配給を手に入れることが出来るようになったので、技術学校学生の時より生活は良くなりましたが、物不足は日本の生活を知る身の上にはつらいものでした。しかし、他の人もそうなのだからと言い聞かせました。教員生活も3年目半ばを過ぎた頃、思いもかけず外国語大学(平壤外国語大学)へ進学しないか、という話が舞い込んできました。しかし、首都の平壤で暮らすことを考えたとき、係累が精神病院にいる父一人の身では、経済的にとてもやっていけないだろうと思い断ることにしました。大学は授業料、寄宿舎は無料、教科書も支給してくれるのですが、他の費用はすべて自己負担であるからでした。するとしばらくして、今度は清津の師範大学に行かないかという話が来ました。全くありがたい話で、このときはしみじみと周囲の好意に感謝しました。そこで経済的には自信がありませんでしたが、卒業までいなくても1年でも2年でもいいからやれるだけ勉強しようと考え師範大学に進学することにしました。

大学進学前に4年間も働いており、さらに大学は授業料、寄宿舎は無料、教科書も支給してくれるというのに経済的に困難な問題があるだろうかと疑問に思われるかもしれませんが、しかし、大学に進学した当時(1971年4月)私には、4年間働いた後であったにもかかわらず、経済的余裕は全くありませんでした。衣料費と、当時は教師としての使命感と情熱もっていたので貧しい子供たちへの補助にすべて使ってしまったのでした。

## 大学生生活

1971年4月、清津師範大学に入学しました。専攻は文学です。大学の授業や課外活動は楽しかったのですが、寄宿舎の食事はひどく不味く、量も足りなかったので始終腹をすかしていました。本来の規定通りに作ってあれば不味くも、量が足りないなどということもなかったはずですが、食堂の関係者が美味しい部分をまず食べてしまい、残りが寄宿生に回ってくるのです。こんなことは他の国では普通考えられないことですが、閉ざされた社会であり、抗議すら出来ません。他の学生はどうしていたかという、親元から副食その他が送られてきていました。ノートや鉛筆、ボールペンなどの文房具（特にノート）が入手困難でした。金額からすればいくらしはないはずなのに入手は難しかったのです。物品そのものが絶対的に不足していたのでしょう。文房具がないと勉学は困難です。衣服は少し持っていたものの、絶望的だったのは靴でした。更に追い討ちをかけたのがクラス女子学生全員で服を作ろうということになったときです。クラス別に団体服を作るというのはよくある話です。チマ(スカート)はこれこれ、チョゴリ(上着)はこうしようと決まっても一緒に作ることができませんでした。

大学では、休暇時期に帰る家がないことから精神的に圧迫を受けました。漁郎郡會文里で両親と三人暮らしのときは農場の文化住宅に入居していたのですが、母が死に父が精神病院へ行ってしまうと農場とは縁が切れてしまい、文化住宅を農場に返し、単身母子二人家族の家に下宿生活をしながら教員生活を送ってきたのです。休暇時、誰もいない寄宿舎で悶々としながら行く末を思い、このまま教師を続けたものかどうか考えて、教師は向かないと結論付けましたが、そうなると卒業まで大学にいと教職から離れにくくなると思いました。

空腹を満たすこと、文房具と靴の入手、服を一緒に作るなどのクラスの付き合いなどが出来ず、また教師は向かないとの思いから結局大学を中退する決心をしました。1972年5月のことです。

今思えば、それだけの物を手にするのにいくら掛かるのか、と嘆息せざるを得ませんが、惨めで、哀れな大学生活でした。北朝鮮ではアルバイトが出来ないのでお金がないとなるとどうにもなりません。こんなふうだったので、当時私はコンプレックスの塊のような状態でした。帰国者の知り合いが何人かいればこの程度の援助をしてくれる人がいただろうと思います。しかし私は、君子一家と連絡が途切れた後は北朝鮮社会に溶けたように暮らしていたので、援助してくれる人は全くいませんでした。また帰国者から全く孤立して暮らしていたからこそ、オラン郡教育委員会も大学への推薦をしてくれたのだだろうと思います。もっとも、私には監視されているという意識は全くありませんでした。とはいえ、時間がおり、読書生活を送ることが出来たので、世界の文学を読んだことは幸いでした。当時は北朝鮮でもまだ外国文学を比較的自由に読むことが出来ました。トルストイの『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、ショーロフ『静かなドン』、オストロフスキー『鋼鉄はいかに鍛えられたか』、トーマス・ハーデー『テス』、デフォー『ロビンソン・クルーソー』等の本を読みました。

ともあれ大学を中退することは中等教員への道が閉ざされただけでなく、一般の労働者として生きていくことを意味しました。人民学校の教師に戻る考えは全くありませんでした。

大学を辞めた後、漁郎郡に戻り、しばらく人民委員会の労働課(日本で言えば人事課)で臨時雇いのようなことをしていました。そこへある市の製鋼所の実験室からの求人があったので人民委員会の了解を得て応募することにしました。幸い採用され、住居もその市へ移ることにしました。1972年8月頃のことです。はじめは実験室勤務でしたが、すぐに製鋼所内の変電所の変電工へと移動しました。変電工の仕事は電気の計器の数値を記録し、電気を使いすぎている部門に関しては電気の使用量を調節する仕事でした。大工場だったためか、労働服、靴の支給があり、まれに白米100%で200グラムのご飯と玉子の昼食が出ました。これは次に移った大補修建築事務所ではなかったことでした。待遇に不満はありませんでしたが、通勤に時間が掛かったので1975年12月一杯で辞め、大補修事務所に移りました。

## 事故

北朝鮮には「社会労働」、「社会動員」という言葉がありますが、日本語で言えば「社会奉仕」に相当します。日本のそれは地域で管理する公園の草取りや掃除などであり、地域の班毎に参加して行動しますが、北朝鮮の「社会労働」、「社会動員」はそれよりも範囲が広く、かつ不参加が許されない、日常の労働とは別の第二の労働とも云うべきものです。私の背がせむしの様に曲がっており、杖なしには歩行が困難であるのはこの「社会労働」に参加中に起こった事故に起因するものです。1976年建設工事の基礎用の石を集めよという指示が行政委員会から人民班に下され、朝4時半からの「社会労働」に参加して石を運んでいたところ、積み上げてあった石が崩れ落ち、直径50センチメートル位の石が私の腰を直撃しました。私は気を失い、現場では大騒ぎになり、病院に運ばれましたが、一般住民用の病院には薬もなく、十分な治療は受けられませんでした。レントゲン撮影だけはしてもらえましたが、異常なしとのことで、実際はよくわからなかったのだらうと思います。日本に残っていれば、こんな事故にはあわなかったろうし、よしんば起こっても、何箇所かの病院に行って見て貰ったろうから、返す返すうらめしい思いです。当時26歳という若さでしたが、事故後2ヶ月は寝て暮らし、その後4ヶ月は杖を突いて歩く有様でした。この6ヶ月は医師から診断書を貰い、職場を休みました。杖なしに歩けるようになって、職場に復帰しましたが、年をとる毎に腰は悪化し、現在は杖なしには歩行困難です。

なお、積み石が崩れた件ですが、これには崩れやすい理由があって、山のように積まず、塔のように積みという指示があったためです。これは検査する側が石の量を量りやすくするためであり、住民の安全は無視されていたのでした。

北朝鮮の医療体系は行政組織に準じていて里、洞には人民病院や総合診療所、企業所や共同農場には診療所があります。これが一次の診療機関です。内科、外科など基本六科に専門



医が十人ほどいます。X線、顕微鏡などの設備はあり、血液や尿検査は出来ますが、肝機能検査などの精密な検査は二、三次診療機関でなければ出来ません。診療所の医師は1、2名です。北朝鮮は1960年から無償医療を実施し、地域別に担当医を置く医師担当区域制を実施、医療先進国を自称してきました。しかし実際には施設不足、医療品不足で、十分な治療など出来ません。入院するときは、布団、毛布、食器類などを用意してマーキュロ、ビタミン、ペニシリンなどの医薬品を闇市場で購入して持っていかなければなりません。90年台になると、病室もベッドも足りなくて、患者を床に寝かせている場合もありました(実際、夫がそうでした)。

## 結婚

1976年1月から勤めた大補修事務所では労働課(人事課)に属しましたが、そこで比較的親しくしていた年長の女性Aがいました。一年ほどしてAさんは別の職場に移っていましたが、ある日職場にやってきて、見合いをしないかと言いました。大学以来のコンプレックスが抜けきらず、多少逡巡しましたが、Aさんの強い勧めに押し切られて見合いすることにしました。相手は10才年長の労働党員で労働者、もちろん帰国者でした。別に暮らしているが、父親も帰国しているといいます。兄弟が日本に残っており、仕送りがあるらしいとのことでした。ただ、一度現地生まれの人との結婚歴があると言いました。帰国者と現地生まれの人との結婚生活は難しいだろうなあ、とは思っていました。

逡巡したのは、コンプレックス以外にも学費無料の大学を辞めなければならないほどの貧しさと精神病院にいる父を持つこと、そのほかに係累がないので援助が全く得られないことが理由でした。ですが、逡巡し、引込み思案な私をAさんは時には母の如く、時には姉の如く導き、結婚へと至らせてくれました。北朝鮮では離婚が女性には特に不利なことなので、結婚届は結婚生活を継続できると確信するまで出すな、という年長の女性らしい行き届いた忠告までしてくれました。それで、5月(1977年)に結婚式をしましたが、結婚届けは12月になって出しました。翌年5月長男、81年長女が生まれました。夫・金基哲は1998年4月28日に死亡しました。

## 夫・金基哲と義父(夫の父)・金ユンドはなぜ北朝鮮に帰国したか

夫・金基哲は1965年に北朝鮮に帰国しました。夫の話によれば、夫・金基哲は1940年9月22日、長崎県対馬町で、当時炭焼きで後に朝鮮総連対馬支部財政部長となった金ユンドの三男二女中三男として誕生しました。夫・金基哲が15歳になる年に母親が亡くなり、その時末の妹は4歳だったので、幼い妹たちの世話は専ら夫がしていたと話していました。妹たちの世話と、学校が朝鮮人には楽しいところではなかったので中学を中退してしまいました。以後10年ほど対馬と大阪で暮らしましたが、中学中退ということもあり、なかなか自立できず、厳しい父と兄たちからもうるさく言われるので、親兄弟から遠く離れて生きていこうと決心して北朝鮮へ向かったと述べていました。1965年当時はすでに帰国

者が激減していましたが、その意味を全く知ることなく帰国船に乗ってしまったそうです。72年に労働党員になり、これはロシア国境近くのアオジというところの精油所建設工事に志願して働いた功勞のファソン・イプタン（火線入党）だそうですが、この程度のことで帰国者が労働党員になれるとは思えないので、父親の成分が良かったのかもしれませんが。なお、ファソン（火線）とは戦場のことで、通常の過程を経ずに、飛び級で入党することを火線入党といいます。

義父（夫の父）・金ユンドが北朝鮮に帰国したのは1966年、夫の帰国の翌年です。夫と義父の話をもとめると、義父が北朝鮮に帰国することになった理由は、三男である夫が、何度も金銭、物資の送付を要求する手紙、電話を繰り返したため、最初の一、二回は言われるままに従っていたものの、そのうちに腹を立てるようになり、夫に自立するよう厳しく要求するようになりました。北朝鮮の実情が全く理解できていなかった義父は日本の長男、次男はすでに自立して立派にやっており、二人の娘たちも結婚したりと、ある程度目途がついていたこともあり、三男のところに行き、そばに居て激励して自立させなければならぬと決心し、妻の遺骨を持って北朝鮮に帰国したそうです。一方、夫のほうは金銭、物資の要求はするものの、父親に来て欲しいわけではありませんでしたが、北朝鮮の実情を正確に知らせることが出来ず、とうとう父親が帰国してしまったそうです。

日本との連絡および金銭、物資の送付はどうなっているのか

北朝鮮では普通個人の自宅に電話はなく、さらに国際電話をするとなると大都市に出向かねばならず、料金を外貨兌換券である特別紙幣のウオン（パクン・トンと呼んでいる）で支払います。普通帰国者はお金がないのでコレクト・コールで通話しますが、盗聴の恐れがあるので用件のみ短く伝えます。

手紙もすべてではないにしても検閲されているので、注意を要します。手紙は出来ることなら書かない方が良いのですが、書く必要があるときは次の要領で書き記します。まず、①金日成、金正日を賛美、②近況を簡略に記し、③最後に送ってほしい物資のことを書くという形式をとるのが安全です。

近況を簡略にすることに関してですが、詳細に書くとスパイ報告と受け取られかねず、また物資不足、生活の困難さを訴えることは体制批判と受け取られ政治犯に仕立てられる可能性さえ、初期（60年代）にはあったようでした。

手紙は例えば、「①金日成元帥の温かい配慮の下、幸せな生活を送っています。②妻子共々元気でやっています。③ところで、家族分の衣類、古着で結構ですから送ってください。セイコーの時計（安いやつでいいです）、少しでいいですから、20～30個送ってください」と書くのが良いです。

手紙を受け取った側は①から北朝鮮はすばらしいところらしいという感想を持ち、②により、元気なことを知り安心し、帰国させてよかったと思うでしょう。しかし、③が続き混乱してしまいます。

③のミソは「少しでいいですから」というところです。北朝鮮は建前として「地上の楽園」ということになっているので、あれがない、これがないということは本来ありえないことなので、許されないのです。またセイコーは当時北朝鮮で名前が良く知られていたので価値がありました。60年代、日本でも時計は高価だったので20～30個と伝えられた側は仰天したことでしょう。こうした理由で私の夫・親子は北朝鮮事情を正確に伝え合うことが出来ず、父親の帰国となってしまったのでした。

次に日本からの送金・仕送りについて述べます。1965年に帰国した私の夫・金基哲は以後毎年日本の兄弟から仕送りを受けていましたが、その方法は手紙、電話で必要な物資を要求するもので、後には連絡しなくとも定期的に送られてくるようになりました。また1970年代後半から日本政府が一般の在日朝鮮人にも再入国許可を出すようになると、夫の兄弟およびその子供が第〇〇次祖国訪問団、あるいは朝鮮高・大学の修学旅行として北朝鮮にやってくるようになり、その際金銭や物資が届けられました。

物資の仕送りにしても送金にしても地域の幹部に知られてしまうという不都合がありました。たかられる原因を作ってしまうからです。さらに仕送りの際には当然税関の検査があるわけですが、その際荷物を抜き取られてしまうことがあります。もともとなかったといわれればそれまでです。

日本の親族から仕送り・送金を受けるようになったので、結婚後は生活に困窮することはありませんでした。それなら心配事は全くなかったかといえば、そうではなく、いつか仕送り・送金が途切れるかもしれないと、いつも不安でした。自力で生きているという意識は全くありませんでした。

## 人民班の生活

1978年5月に長男が誕生してしばらくして職場を辞め、専業主婦となりましたが、地域組織である人民班の生活は煩わしく、付き合いが難しかったので、出来るだけ早く職場に復帰したいと考えていました。人民班というのは通常30世帯くらいで組織され、週に何度か集まり、会議をするのですが、そのなかに生活の総括というのがあって自己批判をしなければなりません。批判することがないときは作ってでもしなければなりません。そのため、小さなことに限定しました。例えば金正日の教示をよく受け止められなかったとか、怠けたとか、掃除をしなかったとか、寝過ごしたとかです。生活の総括の時間になると心配が先にたちました。自己批判に失敗すると厄介なことになるからです。後に相互批判というのが登場するのですが、自己批判より厄介なものでした。なぜなら、自己批判は作ってでもできますが、相互批判はそうはいかないからです。それでよくけんかにもなりましたが、だんだん示し合わせてお互いその相互批判をするようになりました。さらに、人民班で朝4時、5時に出て通りを掃け、庭を掃けといわれたら無条件でしなくてはなりません。先に事故のところでも述べたように、労力動員(社会動員)ではケースにより、世帯別に任された場合は一家全員が出てやり、人民班別に受け持てば一人ずつ出ます。たいてい粗石拾い、石垣積みな

ど力の要る仕事は、世帯別に決められるので、子供であれ年寄りであれ、みんな出て働きます。労力動員としては、水害になれば復旧作業に出るし、農村作業日には農村へ働きに行きます。

#### 遊園地に勤める

勤務先でも当然組織生活はあり、一日の作業が終われば、作業総和(点検)があり、1時間ほどでそれが終わると、午後7時から2時間ほど各種の会議や学習会が開かれます。学習会は主に政治学習で、金日成主義研究班の学習会、党史研究会の学習会、回想記学習会、金日成の教示と歴史学習会、新聞読報会、時事解説会など、さまざまな学習会が絶え間なく行われます。社労青(社会主義労働青年同盟)員(党員として参加できない男女)は社労青の組織に関わって集団主義の生活を送ります。主人の生活を見ていると、労働党員は労働党員で組織生活があったようです。

結婚後、子供が出来て、仕事をやめ、専業主婦生活となりましたが、人民班生活が煩わしく、出来ればそこから脱出したいと思って仕事を探したところ、遊園地の切符売りの仕事が見つかりました。従業員80～90名に達する規模で、遊具は大観覧車、メリーゴーランド、足漕ぎ自動車、大型ブランコ、飛行機の乗り物などがありました。全て自体解決(自力更生)の精神で作られ、輸入したものはありませんでした。1980年頃金日成主席(当時)が現地を訪れた際の、「ここに遊園地を作るように」との教示により作られたといわれています。金日成はそこからの眺望が素晴らしいことから思いついたようですが、海に近いことから塩害がひどく遊具がすぐに錆びてしまい、年に2回ほど塗装を施さねばならないほどで、結局は全ての遊具がだめになり、景色を見るためだけの公園になってしまいました。

支配人は、遊園地を維持するためにたくさんの私財を入れていました。支配人は帰国者で、それらは、日本からの仕送りによるものでした。ところが、日本からの仕送りが細り、塗装費などを捻出することができなくなりました。すると、その支配人は、解任されてしまったのです。私とは馬が合わなかった人でしたが、労働者に転落した支配人を見て、私は、この国はダメだと、人間としての良心から痛切に感じました。

この職場には脱出を敢行する前日である2003年11月13日まで勤務しました。

#### 北朝鮮の住み心地

北朝鮮では自由に考えを述べる事が出来ませんが、自由に話す庶民がいます。それは死を目前にした80歳以上の老人です。その中には日本の植民地時代の生活、韓国の生活、北朝鮮の生活を経験した人がいます。特殊な種類の人ではないにもかかわらず、何故そんなことが起こったのかですが、日本の敗戦時、朝鮮半島が38度線で南北に分断され、当時南朝鮮(韓国)であったのに、朝鮮戦争後38度線の代わりに出来た軍事分界線によって北朝鮮に編入された地域があるからです。代表的な都市は開城ですが、そうした地域で服務した軍人出身の知人から聞いた話です。80歳以上の老人にいつの時代が一番良かったかと尋ね

るとたいていは「李博士（李承晩初代韓国大統領）の時代が最高、今（1980年代）は植民地時代より悪い」と答えたといひます。

#### 金日成死後の大飢餓

1994年7月8日、金日成が死にました。もともと北朝鮮は慢性的な食糧難の国であり、特に朝鮮戦争の後はそうです。しかし北朝鮮において食糧事情が悪化し、飢餓が現実のものとなったのは95年からです。私が住んでいたところでは1993年頃から配給が無くなりましたが、幹部たちや配給所の親戚たちは、94年までは配給を受け取っていました。95年までは配給証明書に1ヶ月分いくら配給できなかったなど、記録されていましたが、その後はそんな記録も無くなりました。国民には配給は全くなくなっても、物資の横流しをすることができる人、たとえば党幹部の親戚がいる人などは、なんとか生きていくことができました。

私が1988年から脱北（2003年11月14日）前日まで勤務していた遊園地には従業員が80～90名いましたが、96年に2名、97年に1名、98年に1名死亡し、いずれも餓死でした。この遊園地の支配人は帰国者で、日本に有力な親族があつて仕送りを受けており、その金で食料を闇市場から購入し、困窮者に5キロ、10キロと手渡していたのですが、それでも餓死は防げませんでした。

96年には当局によって「トウモロコシや稲の根を掘って食べよう」というキャンペーンが行われました。しかし実際に誰かが実行しているという話は聞いたことがありません。

97年に入ると駅・市場・道端に死体がゴロゴロしている状態で、市場には子供の死体が多くありました。こうなると死体を丁寧に扱う余裕さえ全くなり、足で蹴飛ばし、蹴り転がして車に乗せ、山奥に運び、身元の確認も出来ないまま、というより多すぎて確認が出来なかったのですが、深い穴を掘って埋めていました。私もこの頃は本当に苦しい状況でした。96年に夫が病気になり、薬をたくさん使い、97年3月にはお金がすべてなくなってしまいました。お金は日本の夫の親族に電話すれば必ず送ってくれたのですが、前年薬のことで世話になっていたので出来るだけ電話はしたくありませんでした。97年には甥が朝鮮高校の修学旅行で来ることになっていたのだから、その時に必ず荷物と一緒にお金が届くはずだったからです。そこで荷物かお金が届くまで家財を処分して、そのお金でしばらく凌ごうと思ったのです。闇市場に家財を並べ、そこに座って買い手を待ちましたが、道端に死体がゴロゴロしている状態では食物以外の物が売れるわけもなく、結局失敗してしまいました。もう駄目かなあと思い始めた8月、日本から荷物（ダンボール箱12個くらい）が届き、その中には食べ物がどっさり入っていました。10月か11月には甥が朝鮮高校の修学旅行でやって来て、その際お金（二十何万円だったかと思ひます。）も届けられました。夫の親族には本当に助けられました。このときだけでなく、何十年も助けてくれました。私たち一家が今生きていられるのはそのお陰です。

死体の数が余りに多く、飢餓の状況がひどくなると、日本から訪問してきた親族に北朝鮮の悲惨な姿を見せることになるので、政府はなかなか親族と会わせようとせず、95年以降は親族の地元の家には行かせないで、平壤の高麗ホテルで会わせるようになりました。

98～99年には「ウサギとタヌキは全部死に、オオカミとキツネだけが生き残った」という言葉が、人々の間でよくささやかれました。

つまり、弱い人やいい人は全て死に、凶暴な人や狡い人だけが生き残ったという意味です。

## 脱北

2003年2月末、息子が失踪しました。当初は仕事かお金の都合だろうくらいにしか考えていませんでしたが、8月3日に総選挙が実施されることになり、心配になりました。北朝鮮では選挙に参加しないのは反国家行為とみなされ、政治犯とされてしまうからです。そこで選挙を前にした時期に、担当の保安員に相談したところ、商売で中国にでも行っているのではないかと、しばらく様子を見てみるのがいいといわれました。10月22日(夫の誕生日)に息子の知人の姉夫婦がやって来て、息子は今中国に居るといい、中国で稼いだ金を渡したいので茂山(北朝鮮北部、中国国境近くの地名)まで来てくれと言いましたが、不安が先に立ち断ったところ、その夫婦は茂山の連絡場所と電話番号を書いて残していきました。11月14日未明、別の夫婦がやって来て息子は今中国に居るが、お母さんにお金を渡したいので是非に国境まで来てくれといいました。そこでそのまま住んでいる場所を出て、清津に向かい、そこからトラックで會寧へ行くと、そこで実は息子が韓国に居ることを知らされ、息子に私と娘の脱北を依頼されたのだとその夫婦から打ち明けられました。韓国に居る以上、息子は国家反逆罪、そして連座制で家族は政治犯となり、政治犯収容所へ送られることは必定であるため、私もこの機会に脱北する決心をしました。11月22日未明豆満江を渡り、北朝鮮を脱出しました。1961年5月28日、清津港に到着してから42年5ヶ月25日目のことでした。

以上が脱北までの私の人生であります。北朝鮮政府には、人間が人間として暮らせる社会を実現してほしいです。朝鮮は、頭の中では考えているのに口に出してはまともなことは言えない社会、一度目をつけられると自分の親族も危うくなってしまいう社会、社会主義を標榜しながら何ら機能しておらず資本主義よりももっとタチが悪い独裁的な国王が君臨する社会、司法が機能しておらず正義が実現されない社会、建前の美辞麗句を言い続けなければならない政治的自由・言論の自由が全くない社会です。

私は、そんな朝鮮に、正確なことを何も教えられないまま、理想社会だと言われながら送り込まれました。

自分が生まれたわけでもないところに「祖国への帰国」と称して送り込まれ、ひもじい思いをずっとして、みじめな人生を歩んできました。

私が言いたいことは、「私の人生を返せ」ということです。

以上